

ブルースカイ・キョンシー

幸せに人生を全うしただろうか。悔いも残さずに終わりを迎えられただろうか。

それは否。幸せというのは、この時間が長く続けばいいと思っただ瞬間に訪れるものだ。そして人間は必ず後悔を残して死んでいく。

死んだ先の事は分からずとも、人は想像する事ができる。想像すればするほどこの世に未練が残る。未だ見ぬ何かに期待し、期待されたいと願い、さらにその先に想いを馳せる。

人間の生は想いの繰り返しである。またそれを運命と呼ぶ。自らの想いのレールに沿っていくか、逸脱していくかは神のみぞ知る。己は現在でないと判断する事ができない。

では私はいったいなんだろうか。身体は固まりながら腐り、人を殺す為の爪は伸び、髪が顔を覆い隠す。視界が失われ、身動きが取れない環境下で私はどうすればいいのだろうか。日光を遮断され現世に留まった人あらざる者である私は、今日も感情に流される。

一つの願いに気付かずに。



「おやおや、こんな所に凶暴な僵屍きょうしが居るのう。生前はさぞかし別嬪であっただろうに」

矍鑠とした老人の声が聞こえる。姿を見る事はできないが、気兼ねなく私に近づく人間は道士か愚か者しかない。彼は恐らく前者だろう。少し離れた所から荷物を下ろす音がその証拠だ。

「額に札を貼ってある事から鑑みるに、不幸にもこんな廃村に打ち捨てられたか」

憐れみを感じさせない口調の彼は、口の中に何かを入れながら話しかけてくる。水であろうか。

「見事に炭化した屋根材が日光を遮り、尚且つ手足は屋根の重みに潰され穿たれておる。……どうじゃ、聞こえておるか？」

額に小さな物が当たる。堅さからして小石か、壊れた鎧の一部か。私は一言も発せず暴れる素振りを見せた。首と胴はかろうじて動かす事ができる。しかし動きが鈍いのはきつと今の時間に太陽があるからだろう。直接に浴びてなくても、その辺に落ちている瓦礫が日光を少しばかり反射して身体を鈍らせているのだ。

話しかけた老人は笑いながら何かを咀嚼している。匂いからして干した鳥肉であろうか。

「そなたは生前、学のあるおなごだったのじゃろう。そういった素振りもできるほどに知能が残っておる。この乱世、勉強のできるおなごは相当に貴重じゃ」

「……………無駄に頭が良かったせいで、こうやって僻地に飛ばされこうして死んだのよ」

「ほう！ 流暢な言葉遣いができるじゃないか。面白きかな、面白きかな」

私の態度に老人は一層元気になる。

「…………じゃが、残念な事に今儂が手助けする事はできん。満月で活性化された身体でこの瓦礫を取り除く事ができていないようじゃからな。されど歳月は人も死体も変える。幾らか先の満月の夜、そなたは立派に飛び回る事ができるじゃろう」

「力があつた所で近づいたら、年寄りのまずい血を啜る事になる。飛べるようになった暁には、若くておいしい血を選び好みしていきたい」

「中々に素晴らしき僵屍。さぞかしそなたを使役した道士はお主を失くして悔しい想いをしているじゃろう」

「戻って来ない事から察してもらいたい」

「成程、察してしまった。さて、楽しい会話もここで終わりじゃ。儂は出発せねばならぬ」

「どいへん」

荷物を持ち上げ、杖をつく。地面に当たる音の他に金属が鳴らされる音が響く。錫杖だろうか。

「そなたが感じている通り、儂は西方へ向かわなければならん。老い先短し、この命。果てるならば自らの信じた世界を見てからじゃ」

年寄りには去っていく。どうやら道士ではなかったようで、今の私には全く関係のない相手だったが、私は人生を考えてしまう。

人はあつという間に死んでしまうのだから、選べる自由はあつてもいい。村民は貧しく、その地から出る事なしに朽ちて逝く世の中、旅ができるだけで幸せであろう。

しかし私はこの境遇を嘆いてはいない。その原因が私に足りないものなのだろう。かつてあつたそれは身体から出て行ってしまった。喜びや怒りは感じられるが、失った何かに気づく事はない。ならば静かに眠ろうではないか。次に出会うのは餌か、それともまた

求道者か。

願わくは……いや、なんでもない。



満月の夜が過ぎる事四度。廃村に訪れた盗賊を食べる事三回。

身なりだけはいい私に盗賊が一人近づいてきたところを喉笛一噛みで殺し、死んだ盗賊が集めた金品に惹かれた盗賊を喰らう事二回で合計三回の食事。

最後に喰らった男の仲間が私を滅多刺しにしていったが、普通に生きている。その際に餌となっていた金品は取り上げられてしまった。金品らしき金属音がじやりじやりと遠くまで持っていかれたからもう餌はないのだろう。

盗賊が荒らしたもう村とは呼べないこの場所に私はいる。

生前、私を潰している家を見た事があった。この地域で猛威を奮っていた豪族の家で、それ相応に立派な装飾がなされていた。だから少なくとも遠くからこの家を見つける事はできる。手を潰していたのがその装飾であったのか、盗賊がやたらに喜んで私の手を解放していった。

おかげで手が動くようになった。次の満月の夜にはここを這い出る事ができるかもしれない。這い出た所で私は彷徨う僵屍に変わりはない。あの老人の言った通りに飛び回る事ができるだろうか。その事だけが気になる。

時間は夜。冷たい風が吹いてくるが、元々身体が硬直しているから寒さで動けないという事はない。満月でないようなので最大の力を発揮する事ができないという、つまらない夜であった。

そんなつまらない夜に響く足音が一つ。また夜盗であろうか。しかし夜は狼の群れが訪れる事があり非常に危険だ。一度私の元にも狼らしき動物がきたが、身体の腐敗臭にやられたのか私を喰らう事なく逃げて行った。動物も寄り付かない私とこの場所に何の用だろうか。

「……やっと見つけた」

女性が私に声をかけた。嗅覚から判断するに妙齢の女性。

私は帰れと言わんばかりに暴れた。何だかその女性の匂いを嗅いでいると懐かしい感じがしたからだ。僵屍としての本能が早く喰らえと急かしてくるが、かろうじて残っている理性がまだその時ではないと訴える。もう少し近づいてから喰らえばいい話だ。確実にいこうじゃないかと宥める。

欲求が少し収まった。この身体にもだいたい慣れたようで一安心だ。

「ごめんね……本当にごめんね……」

女性はいきなり泣きはじめた。後悔でもしているのだろうか。しかしどうして私に向かって泣くのだろうか。

どうして私はその声を聞くと胸を締めつけられる痛みを感じるのだろうか。

「……黙って」

痛みをもたらす女性に私が声をかけると、息を呑む音が聞こえた。

「——なのね？」

女性は何かを口に出した。その何かは雑音で消されていたが、一体何なのかは想像できなかった。

「何を言ったかは判別できないけど、多分それが私」

私の答えに女性はまた泣きはじめた。先程の嗚咽とは少し違うようだった。

「……見えないからわからないけど、貴方はまだ生きていますのでしょ？ 何故か貴方を食べたくないと思うから早々に去りなさい」

話が違わないかと私の内側で叩く本能。

——食べたくないと思うものを食べたいだなんておかしいでしょう。

——ではお前は盗賊を何故食べた。

——それは私と本能が一致した結果。今回は不一致な為、黙りなさい。

——お前がお前でなくなるぞ。

——知った事か。

私の人生なんてもうどうでもいいのだ。どうでもいいと思うからこそ、この女性を食べたくないと思う致命的破損をどうしても守らないといけない。

どのくらい女性は泣いただろうか。私は本能と争っていた故に、時間の経過が分からない。

「生きているだけで嬉しい」

女性は立ちあがり、そして私の脚を潰している柱に手をかけた。

「……何をやる気なの？」

僵屍の私でさえも動かす事ができないのだ。非力な女性一人だけの力では私を潰す柱を

動かす事も到底できない。

「私は——が死んだと思っていた。でも生きていた」
生きている女性が恐ろしい事を言い始めた。

「死んでいる私に生きているとか、壊れているんじゃない？」

「そうね……壊れてしまったわね。だからこの人生、——に捧げるわ」

雑音と共に女性の匂いが近くなる。本能が喜ぶ。

手を伸ばせば爪で柔らかな喉笛を切り裂く事ができる。毒を含んだ爪で殺すことができる。

「……ああ、貴方は本当に壊れてしまったのか」

壊れている私は、女性を肉体的に壊す事を決めた。

顔を近づけた女性に抱きついて唇を重ね、一思いに喉笛を切り裂いた。断末魔をも切り裂くほどの力のおかげで声は聞こえない。聞こえるのは血が噴き出す音。懐かしいと感じた匂いは、慣れ親しんだ血の匂いへと変わっていく。傷口から噴き出す血を一通り啜った後、女性の服を切り裂き、痙攣する柔らかな肉を食べる。女性の肉は僵屍になって以来初めて食べる。歳のせいか、少し味は衰えるがおいしい。身体表面の皮と柔らかな脂肪をいただく。次に蠕動する新鮮な内臓を喰らう。骨の髄まで残さずしゃぶる。

絶対に残してやるものかと衣服以外の全てを喰らう。零れた血も届く範囲で舐める。土の味が混じる事が多々あったがそれでも止めない。この女性の全てを頂くと決めているのだから。

今宵の夜は寒いようだが、私にとっては温かい夜であった。



暗い夜、満月が辺りを照らしていた。焼き討ちされた村に残るは炭化した家屋、賊に荒らされたような痕跡、そして酸化した血の色で塗れた服。元の色が何かはわからないが、死んでいる私にとっては何だか放っておけない布切れ。

その服を纏っていた女性を食べて迎えた満月の夜。私に視力が戻った。腐っている目のはずなのにどうして視界を映す事ができるのかは不明だが、死体がこうして思考できる方が大きな問題なのだから、気にしない事にした。

硬直した腕で地面を掘る。私の脚に向かって掘り続ける。硬直した身体で掘る事は困難

を極めたが、数時間で目標の所まで掘る事ができた。

下り斜面に乗った私の脚を引っ張る。少しの力でも地面に向かう力で動かす事ができる。偶然強固に組まれた家の残骸だが、一度ずらしてしまえば、残りの力で突破できるのではないかと考えたのだ。

伸びた爪が剥がれて血塗れになってしまったが、その犠牲に似合った結果が訪れた。瓦礫の上部が崩れ、私の頭に残骸が降り注ぐが力任せに振り回す腕で潰される事は回避できた。

なし崩しであっさりと抜けた足を引きずりながら、別の瓦礫の下に移動する。あの布切れは啞えて引き摺った。潰れた足が再生するのを待つか、若しくは飛ぶ練習をするか。

どちらかが成し遂げられるまでは今までと変わらぬ生活のようだ。



蒼穹に羽ばたく鳥を眺めながら、私は飛ぶ事を意識した。飛ぶというよりはどこかに引っ張られる感覚と言うべきか。日中であっても短い時間であれば飛べるぐらいに回復はした。そして今宵に満月を迎え、めでたく私はここから去る事ができる。足も長い爪も無事再生した。

——お前はどこへ飛ぼうというのか。

——わからない。

——何の為にお前は飛ぶと願うのか。

——わからない。

本能と自問しても、自ら考えても、答えは出なかった。理由はあの老人であろうか、あの女性であろうか、それとも何かの感情を失っていると気付いてしまった私が混乱しているせいであろうか。

老人は信じた先に終わりを求め、旅をした。女性は旅をして、信じた先に終わりを選んだ。

「……私に足りないのは信じる事なのか」

その言葉は蒼穹に溶けていく。人ならざる者にしては小さく揺れる声に、私は僵屍になって初めて笑った。

「いや、わからないからこそ旅をするのね。彼らには目的があった。終わりを迎える場所

があった。私に足りないのは、私が失ったのは……きっとあの感情」

感情を失って僵屍になった私が、失った感情を取り戻す旅を——否、旅なんて生易しいものではない。これは冒険だ。本能に抗い、身体を痛みつけ、危険を冒しても尚進む。私は冒険をしようとしている。

私を冒す蒼穹は眼前に広がっている。逃れようの無い広い世界で私は見つける事ができるのだろうか。どこへ行こうと自由ではあるが、それは真の自由ではない。

「少なくともここに餌はない。寄ってくる者がいなければ飛び立つべき」

私の自由を縛りつける本能に言い聞かせて、私は練習を再開した。

先の理由の答えはわからないが、一つだけ目的ができた。人を喰らう事以外の目的。

それは——願わくは、この蒼穹の下で笑える日を。